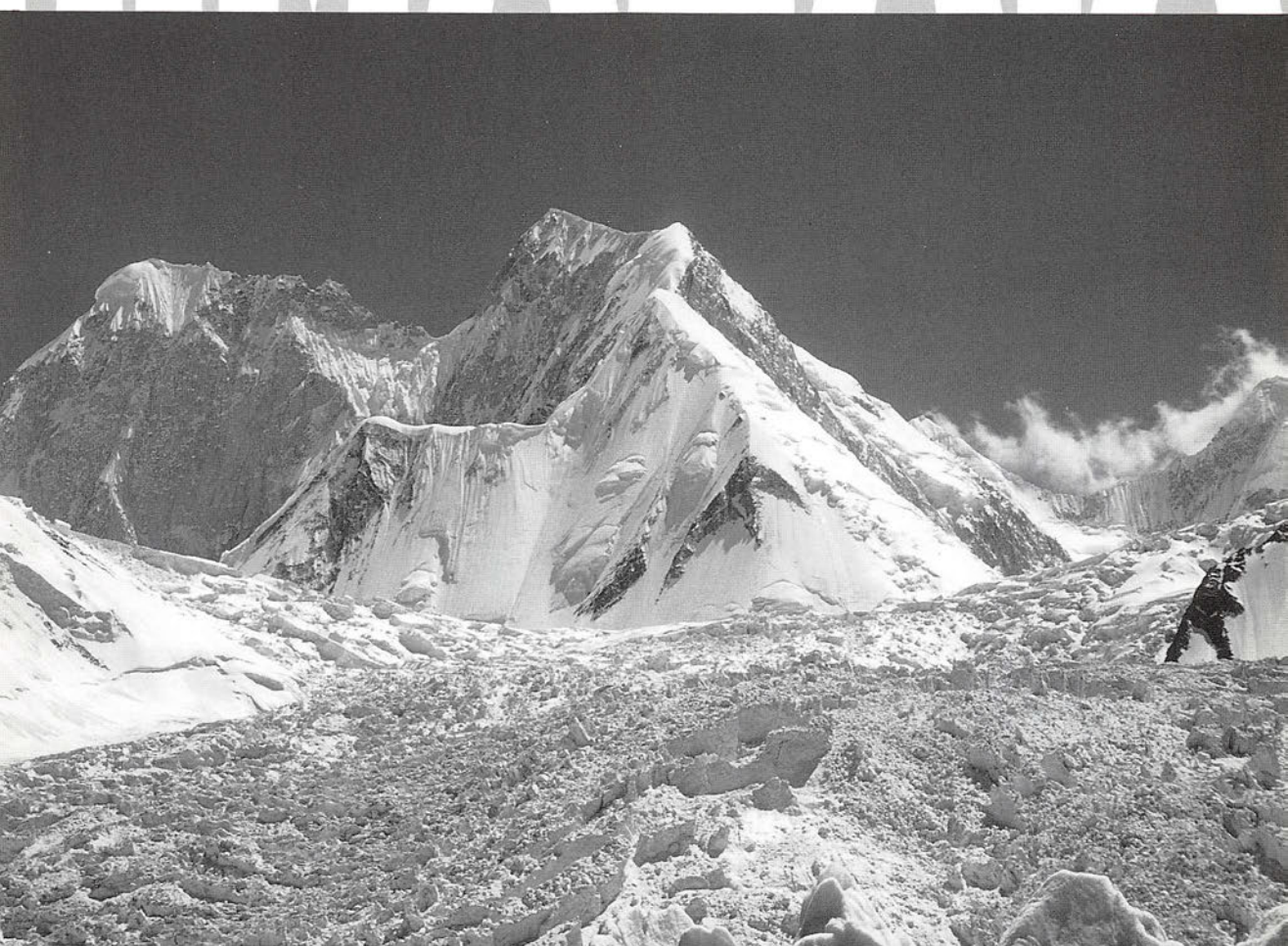


ヒマラヤ

No. 290



1996 JANUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

H A J から募集のお知らせ

30周年記念行事

本会は2年後の1997年10月に創立30周年を迎えます。これまでも節目ごとに記念行事が検討されましたが、これまでは諸般の事情で実施されるまでには至っていませんでした。

本年5月27日開催の理事会に於て、30周年記念を迎えるにあたって「④諸外国からのゲストを迎えての行事・式典」、「⑤H A J 30年誌の発行」「⑥記念野外活動（登山を含む）」の3項目について常務理事会で分担して進行することが決定されました。

現在のところ常務理事会の分担としては、④を八木原常務理事、⑤を山森専務理事、⑥を尾形常務理事がそれぞれチーフとなって進めることになりました。

そこで会員の皆様からそれぞれの項目について提案、アイデアを募集致します。特に所定の用紙はありませんのでH A J事務局宛郵送・FAXでお寄せ下さい。

合同登山隊員

H A Jではチベットと合同登山を協議中です。目標の山については、2～3に絞っていますが、対象は7千メートル以上の山で、あまり登山記録のない山、日本人未登の山、未踏峰です。隊員数など状況が許せば複数の山も考えています。

合同登山は立場の違いを理解してはじめて成り立ちます。今回の合同は特に合同でなくとも許可取得できる山です。

情報の少ない山で異文化の民族との合同登山の実践を希望する真摯な岳人の応募を期待します。

記

1. 登山期間予定：1997年春
2. 場所：中国、チベット自治区ヒマラヤ山脈
3. 個人負担予定額：100万円程度
4. 募集人員：10名
5. 資格：冬山5年以上
6. 申込み先：H A J事務局宛

表紙写真

C2～C3間の悪場の中の数少ない憩の場に辿り着くと、崩壊音の断えることのないヤズギール氷河の奥にプマリ・チッシュ（7,492m）が堂々と聳えていた。C3までもう一息だ。（H A Jキンヤン・キッシュ登山隊'95）

ヒマラヤ No.290

1. キンヤン・キッシュを目指して

H A J キンヤン・キッシュ登山隊'95

14. ネパール・ヒマラヤ雪崩死亡事故

16. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・ヒマラヤから・Books〉

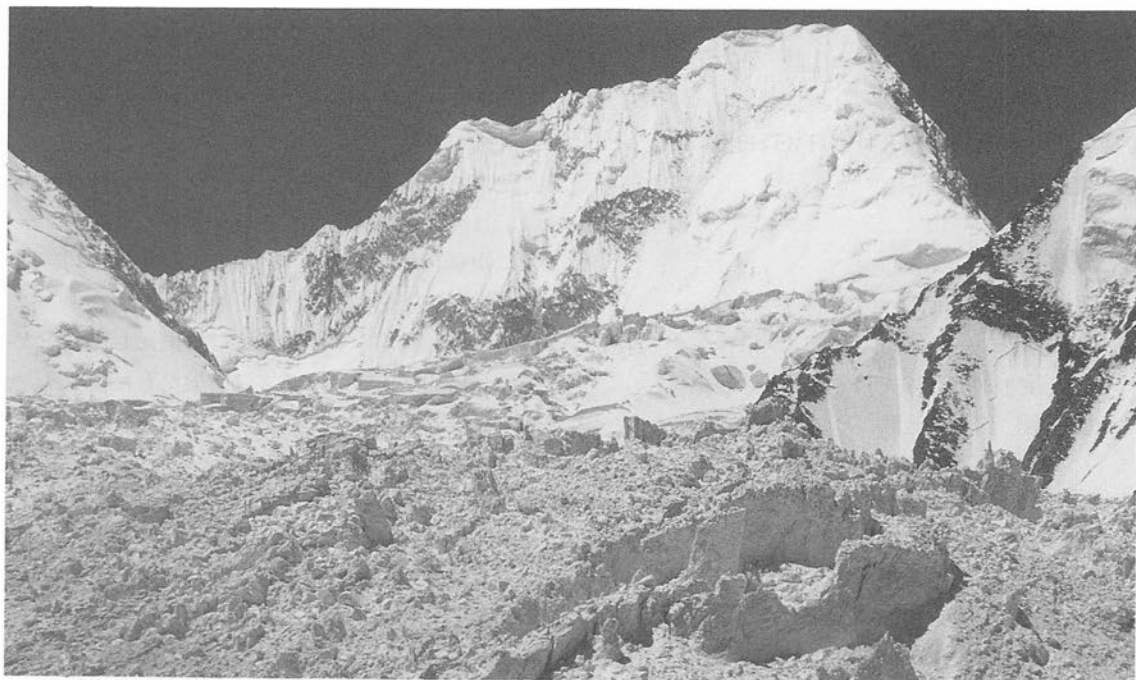
19. OBITUARIES（追悼） 今西寿雄氏

19. H A J 登山隊募集 ームスターグ・アター

20. 中国高峰登山15年小史(9) 山森欣一

24. 寸感・事務局日誌

キンヤン・キッシュ目指して



H A J キンヤン・キッシュ登山隊'95

はじめに

キンヤン・キッシュ、私にとっては何とも軽やかに、快く目にした山だった。キンヤン・キッシュを自分の目で見てみたい、登山計画をしてみたいと思いつつも、チャンスは無く、何年も過ぎた。

高所登山から何年か離れていたが、94年H A Jのサマー・キャンプで中国のムスターグ・アタに行く事になり、再度高所登山を計画・実施してみたい気持ちに拍車がかかり、次のチャンスとして浮かんだのが長年脳裏にあった山、キンヤン・キッシュだった。調べる程に、困難な山、雪崩の山、危険な山というイメージが強くなったが、目標に定めた。

ムスターグ・アタ7,546mの頂に全員が登頂した後、喀什から他隊員と別れ、単身バスでクンジュラブ峠からパキスタンに入った。一旦イスラマバードに入り準備を行ない、キンヤン・キッシュの偵察に出発した。先ずバスターから北面に位置するシムシャール村、そしてヤズギール氷河舌端付近の

約4,000mに登る。再度バスターからフンザに戻りバスター氷河に入り南面の1964年東京大隊が目指した南稜を望み、1971年ポーランド隊が初登した時に入ったプマリ・チッシュ氷河に入り、9月の不安定な天候にもかかわらず、両面からのキンヤン・キッシュを写真に収める事が出来た。その結果、アプローチ、地域への興味、登山ルート等を考慮し、北面シムシャール側より入山することを腹に決め、偵察を終えた。

隊員を集めるにあたり、種々の状況・条件で最終的に4人となるが、ルートの状況から勘案し実行する事にし準備を進めた。殆どの人に絶対登頂出来ないだろうと云われる度、逆に何が何でもといった妙なプレッシャーも消え、むしろ伸び伸びと登山活動が出来る様な雰囲気だった。

困難性より危険性が高かったルートの中で4人ともかなりの行動をし、東壁約6,700mで断念したが、皆それなりに満足し、長年脳裏にあった山は期待以上の山で、キンヤン・キッシュを目指せた事に幸せを感じている。（記 飛田和夫）

隊の構成

1. 目標の山
キンヤン・キッシュ (7,852m)
パキスタン・カラコルム山脈
2. 登山期間
1995年6月12日～8月27日 (77日間)
3. 登山の目的
北稜からの登頂
4. 結果
8月4日東壁6,700mで断念
5. 隊の構成
隊長 飛田 和夫 (49)
隊員 田村 政勝 (53)
大谷 日佐夫 (25)
寺沢 玲子 (43)
連絡官 K・A・サティ (23)
高所ポーター 2名
コック 1名
キッチンボーイ 1名

登山概略

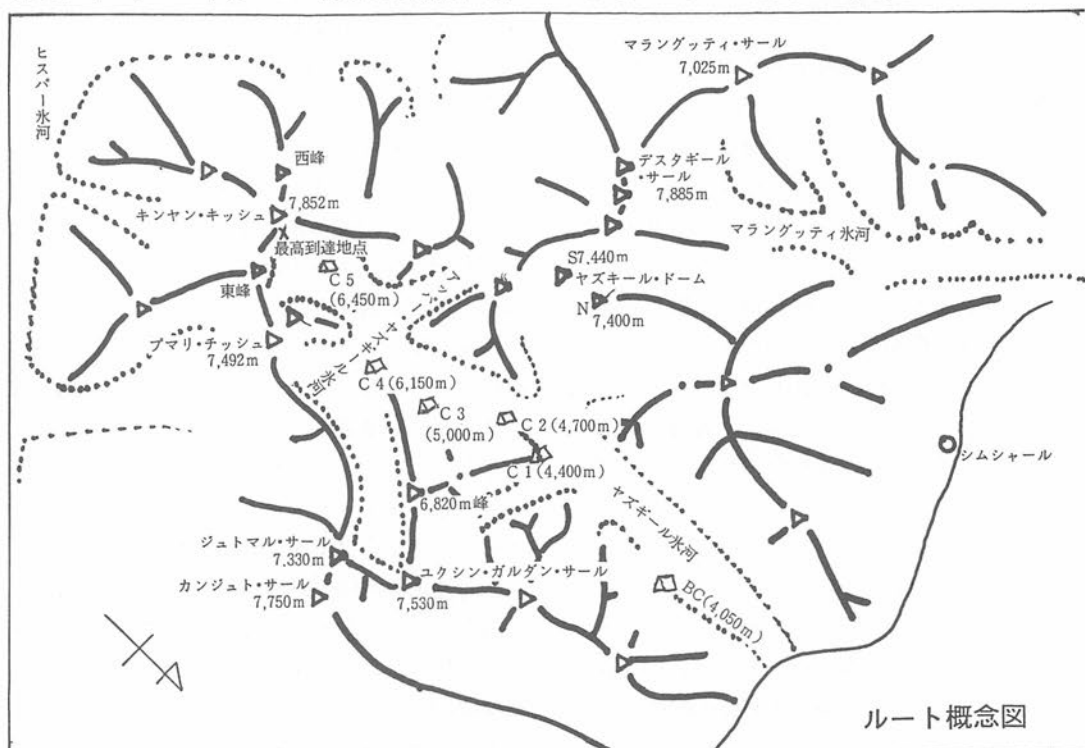
1994年キンヤン・キッシュの北面及び南面の偵

察結果をふまえ、北面からの計画を進めた。

ルートは、パスー村からシムシャール河を辿りシムシャール村を経てヤズギール氷河を右岸に横断した上部付近にBC設営、ヤズギール氷河～アッパー・ヤズギール氷河～キンヤン・キッシュ東壁下～東壁～北稜上～北稜～山頂のロング・ルートを計画・実施した。

ヤズギール氷河～アッパー・ヤズギール氷河へは、11年前の1984年にユクシン・ガルダン・サールに初登したオーストリア隊と、同年ほぼ同時期に同峰の北稜を目指し北稜を断念した後、オーストリア隊と同ルートから第2登を果たした東洋大隊それに1986年同峰の第4登を果たしたスペイン隊の3隊しか入っていないこの氷河ルート上に少しは彼等の形跡はあるのか。

アッパー・ヤズギール氷河上へは、南面のヒスパール氷河～キンヤン氷河から1981年神代高校山岳部OB会隊がユクシン・ガルダン・サールを目指し初横断した後、数隊の日本隊が入っている、横断したルートからキンヤン・キッシュまでのプラトーそして約1,000mの東壁は末路。北稜上標高6,900mから山頂へは1981年にイギリス隊が西側から達したものの悪天により断念し、4回目のトラ



イで1988年に初登攀した北稜から目指そうと計画を立てた。

計画を進めるにあたり、隊員4名ではかなりのロング・ルートで肝心の後半になり力尽きる事がないよう、東壁下までは負荷を少なく、順応に専念出来るよう、さらに今回のメンバーは、50代1名、40代2名、20代1名の構成で、20代の大谷は初めてのヒマラヤという事で計算は難しく、田村は毎年高所登山を経験して順応には対応出来るだろうが、行動日数や疲労による行動面での制約が考えられ、飛田も昨年のムスターグ・アタ登山での高所障害等があり、荷上要員として高所ポーター(HAP)2名を雇用する事にした。

ルートを考察し、装備を決めると共に登山期間を45日間として食糧等の基本計画を組み立てた。目指すのは頂だが、先ずアッパー・ヤズギール氷河に立つ事、次に未踏の東壁に入り東壁を攀ること、北稜から山頂に立つ事のステージを組み立てた。結果はどの様になれ、4名全員が納得し、満足できる結果にしようということで実施に向った。

BC以上は予想していた以上に、ルートとしたヤズギール氷河と右岸のコンタクトライン沿いでは、側壁のガレ場、土砂崩れの場合、落石、スラブ帯と氷河の移動による氷河内のルートの嫌らしさと悪さが続き、C3以上は氷河と6,820m峰側壁のコンタクトラインの雪面帯をルートとしたが側壁の懸垂氷崩壊の恐怖・雪崩・落石・雪面上のクレパス帯の通過といった困難とは掛け離れた危険的要素の多いルートになる。ルート工作は飛田・寺沢、飛田・HAPのグラマリ、最終的には飛田・田村で行なうが、荷上げは全面的にHAP依頼に出来ずかなりの部分で隊員が行なう事になる。

ルートに対応する登攀具はほぼ満足出来たが、食糧計画は悲惨を極めてしまった。原因は1つのステージの時にHAPが自分達の主食を上げてなく、上部への荷上げの為に荷上げされた日本食を消費してしまい、追い打ちはタクティックスの失敗になるが、C1以上でルート工作日数が増え当然ながら上部キャンプに計画以上に滞在した事だった。後半はBCで α 化米を作り、BC主食のアタも上部キャンプへ上げ主食とし、行動食はBCで作らせたチャパティを食していた。

キャンプ展開にも問題があった。各ステージの終りにはより上部キャンプへのルート工作と荷上げを済まし、BCに下降し休養した後に次のステージに向けての行動開始が望ましかったが、いずれも上部キャンプを決定出来ないままに下降せねばならない状況が続いてしまった。その結果が東壁中間部の約6,700mで断念する事になってしまった様にも考えられる。なによりも計画段階で肝心の後半に力尽きないという事で実施していたが、飛田はBC以上の全ルートでルート工作をせねばならず、又、隊員にもかなりの部分で荷上げの負担が計画以上になってしまった事等が重なり、結果的に力尽きてしまった様だ。飛田が東壁で不調にならずに8月3日に北稜に達していたなら4日の行動中に確実に悪天に捕まってしまった様子で、力尽きた事で結果的に最悪の事態に陥らなかったと、妙に納得している。

しかし、アッパー・ヤズギール氷河に立て、手つかずのキンヤン・キッシュ東壁の中間部まで我々の足跡を残せた事に全員がそれなりに満足し、登山を終了する事が出来た。

行 動 記 録

6月12日 イスラマバード

乾燥野菜作りを含む先発業務を全て終え、田村と大谷の出迎えに空港へ。

6月13日 イスラマバード

最終梱包チェックをし、ブリーフィングをする。若干23才の連絡官は陸軍将校で初めての体験に緊張気味である。

6月14日 イスラマバード〜ギルギット

早朝イスラマバードを発ち、16時間の車の旅でギルギット着。

6月15日 ギルギット〜パサー

買い出しをし、昼前ギルギットを発つ。アリアバードの先で車を止めて写真を撮っていたら、日本人らしき男性が寄ってくる。札幌在住の阿部淳氏である。停年退職を機に、インド〜パキスタン〜ネパールの旅に来られている事のこと。5時間程でパサーに着く。

6月16日 パサー

夜間は涼しく眠り易いパサーも晴天下では40℃

とイスラマバードと大差ない暑さである。

6月17日 パスー

キッチンボーイが訪ねて来、サーダーが明日来る事、ポーター達はドゥットの手前のシュガダンに待機していることを告げる。高所ポーターのグラマリとフセインも到着する。

6月18日 パスー

アリアバードのACに入山のあいさつをして宿に戻ると、サーダーが来ている。早速ポーター賃金を打ち合わせる。天候が崩れ始めてきている。

6月19日 パスー

雷雨は周辺の山稜に雪化粧を施した。明日からのキャラバンが思いやられる。投宿している宿の手伝いをしているシムシャル出身者は、他地区から来た高所ポーターに難色を示している。翌日のポーター雇用時にこの事が問題になるとはこの時は思いもしなかった。(記 寺沢玲子)

往路キャラバン

パキスタンに着いて、むせかえる暑さの中、荷の梱包を終え、イスラマバードを逃げる様にしてチャーターバスに乗り込みキャラバンスタート地のパスーへ向かう。

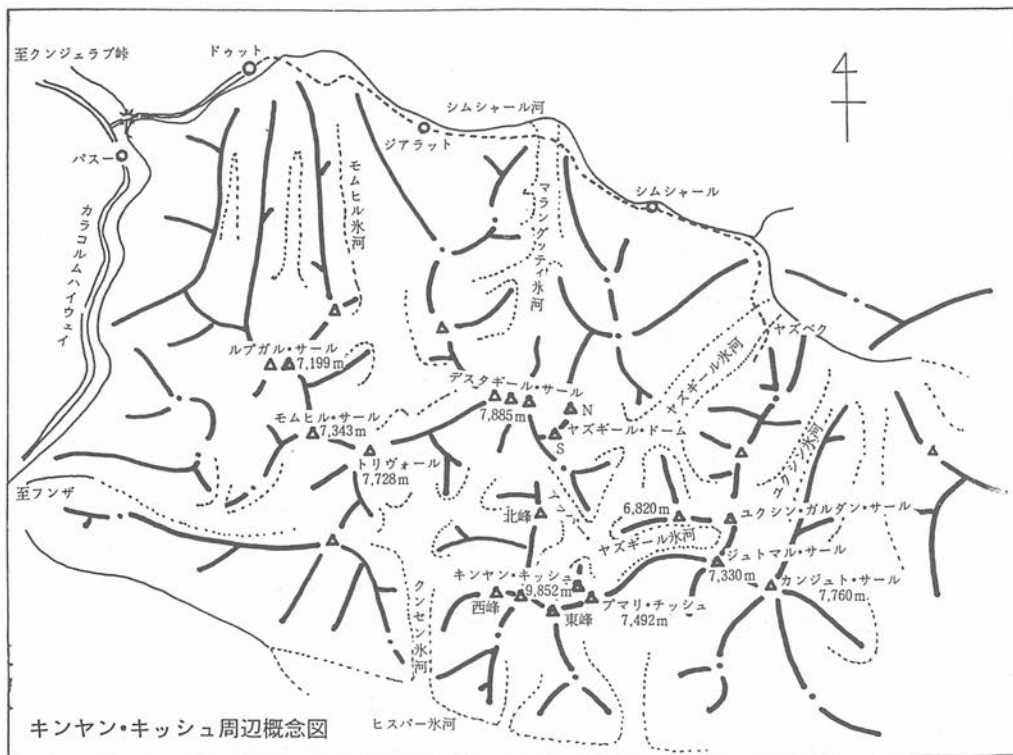
6月20日 Passu~Dut

今まで雲一つない快晴が続いていたが昨日から怪しい雲行きになって来ていた。8時にチャーターしたジープに隊荷を半分乗せ、田村さん、サーダーのフシャル・ハーンと自分が出発する。ジープはシムシャル河沿いに約1時間程走るとシュガダンに着き、ジープはピストン輸送の為、荷を下すとパスーへ戻って行く。ここから歩きとなるわけだが、Dutまでは1時間弱で着いてしまう。(15時Dut着)

6月21日 Dut~Ziarat

夜から降りだした雨はやまず、雨の中6時半にスタートする。吊り橋を1つ渡り左岸の高台を歩き何度かガレ場の悪いトラバースをする。

9時頃になると空が明るくなり青空が見えはじめると、一気に気温が上がり雨具を着ているとサウナになってしまう。雨も降ったりやんだり、雨具も着たり脱いだり。面倒くさくなるころ雨はやみ暑さだけが残る。河原に降るとZiaratは近い。歩きにくい河原を行くと吊り橋を2つ渡り約1時間でZiaratに着く(10時半)。隊荷のチェックを次々とすませ最後尾の飛田さん、寺沢さんが到着する(12時半)。昼飯のチャパティ



▼ヤズギール氷河とキンヤン・キッシュ



がうまいのなんのって。

6月22日 Ziara t～Shimshal

今日も曇りだ。6時過ぎ出発。昨日と同じ様に田村さんと2人で先行する。2時間半も歩くと、マラングッティ氷河に出る。この横断に1時間をかけ高台に上がり飛田さん達と交信をとる。この頃になるとポーター達は韓国隊の時の疲れが残っているのかペースが落ちて来ていて、自分達がトップを歩いていた。高台の台地を10分くらい行くと再びシムシャル河に出るが、今度は緑もある。左岸のガレ場をトラバースしながら河原に降り、後はシムシャルまで河原歩きが続く。

小麦というのはどうも腹もちが良くない。行動食もビスケット4、5枚では力が出ない。しかし、シムシャル村に近づくにしたがい緑が多くなり、シムシャル村の台地に上がると一面菜の花畑の黄色い花で圧倒されてしまう。ここだけ別世界の様だった。

6月23日 Shimshal～ヤズベク右岸

昨日、約束した7時を過ぎてもポーター達が集まらない。本当は若手組は休みたかったらしいが、年配組が行くと押し切ったらしい。年をとるほど元気になり手がつけれなくなるのはどこの国でも同じなのだ。

キャラバンは30分遅れで出発。途中、村長の家に寄りあいさつをすると8時を過ぎてしまった。村を出て2時間も歩くとヤズギール氷河の左岸まで来る。ここで約1時間大休止をとる。再び歩き始め氷河を横断し高台に上がる。今日の行動はここまで。ゆっくりしているポーター達は2時間遅れで到着。夜は羊をシメて宴会だ。

BCへ

6月24日 ヤズベク右岸～4,000m順応

久しぶりに朝から青空が見える。飛田さん、寺沢さんは先発で順応出来ているので先にBC入りをする。田村さんと自分は4,000m台の順応ということでこの場に残る。7時には自分達以外はBCへと向かう。テント場は急に静かになり、思わずボーッとしてしまう。9時の交信後、HAP1人を残し2人で高所順応に向かう。2人とも順調で4,200m台を往復する。13時頃テント場に戻るとポーター達がBCから戻って来ていて騒がしいがそれも束の間、再び静寂がやってくる。しかし晴れていると、こうも暑いのか。たまらん。(大谷)

ヤズギール氷河右岸のサイド・モレーンと右岸の中間部で、11年前のオーストリア隊のキャンプ跡と思われる場所(4,050m)にBCを設けた。直接水を得られず、回りには殆んど緑も無く、右岸からの落石の心配のある場所だが、ここしかない。(飛田)

6月25日 ヤズベク右岸～BC 先発C1偵察

7時出発。今日もいい天気だ。HAPの出迎えを受け4人でBCを目指す。9時前にはBCに着く。我々が目指すキンヤン・キッシュは遥か遠くピークがちょこんと見えるだけだ。長いぞこれは。飛田さんと寺沢さんが12時過ぎC1の偵察から戻る。さあ、いよいよ登山開始だ。(大谷)

登山開始

6月26日 BC休養

夕方から天気が快復し、加えて風も強くなる。



▲BC (4,050m)

BCの位置はどうも風の通路の様だ。風邪気味の田村は昼夜共に食事がノドを通らず、風邪薬とビタミン剤を摂って横になっている。

6月27日 BC休養

濡れ物を干かし、安全祈願と荷上げ品のチェックをし、今後の打合わせをする。連絡官は上部へ一緒に行きたいと云うがルートが悪絶さからあきらめてもらう。

6月28日 BC→C1

登山開始。3隊に分かれ、時間差でC1へのルート工作、荷上げに向う。ルートの悪さに、明日からが思いやられる。

6月29日 BC→C1

昨日同様、C1へのルート工作、荷上げに向う。田村が疲労と風邪による不調、大谷はヒマラヤ初見参と種々の緊張感からだろうか不調になってしまい、明日からの偵察は急拠寺沢に代ってもらう。

C1(4,400m)～C2

6月30日 BC休養、C1移動及びC2偵察

田村、大谷はBC休養、HAP2人と飛田、寺沢はC1設営。BCに下降するHAPを見送った後、上部の偵察に向う。ユクシン・ガルダン・サー

ルから流れ出る支氷河の、真白い氷塔とテーブルストーンの乱立する間を横断し、対岸のガレ場に出る。支氷河とヤズギール氷河の接合部から再度ヤズギール氷河沿いに進もうとし、回り込もうとする付近はアイスフォールの崩壊で危険な為に、ヤズギール氷河と支氷河を分ける尾根の急なガラガラの側壁からボロボロのリッジを偵察する。

C1に戻りモレーンをわずかに登るとユクシン・ガルダン・サーが望め、東洋大隊と思われるキャンプサイトの跡があり、日本食の袋を発見、ゴミと云うより懐かしさを覚える。ヤズギール氷河対岸には夕焼に染まるヤズギール・ドームが輝いている。

7月1日 C1移動、C2偵察

昨日のボロボロのリッジから尾根に登り、反対側へ下降するルートを探しながら登って行く。途中黒ずんだ様な竹ざおを2本見つける。多分東洋大隊も上ったのだろうが、それらしいルートを見い出せないまま針峰の付近、約5,350m迄登る。同ルートを下降し、それらしきルートを確認し、

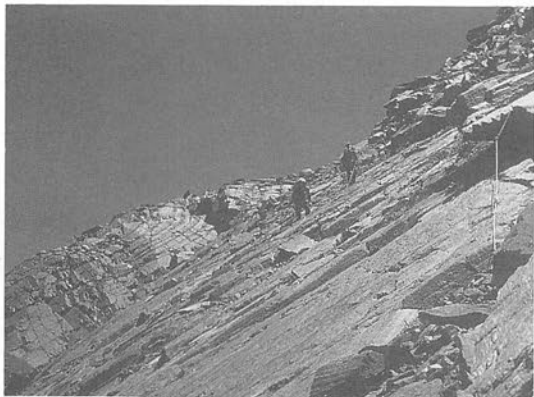
4人が移動して来たC1に戻る。田村・大谷も順次回復の様子だ。

7月2日 C1偵察 C1移動



▲C1～C2間のリッジ上から望むヤズギール氷河と支氷河の接合部

▼C 1～C 2間の岩壁の下降



調子の戻って来た田村、そして荷上げのルートとして行動出来るか確認する為に、グラマリを加えた3名で、ボロボロリッジを約400m登り反対側へ下降する。

ボロボロリッジを登り下降した地点がC 2となるので、C 1～C 2の行動時間の短縮・疲労を防ぐ為に大谷・寺沢・フセインでボロボロリッジ下にC 1移動。移動後飛田・寺沢・H A P 2名はB Cへ下降。

7月3日 田村・大谷 B Cへ下降

ボロボロリッジのルート整備を行なった田村・大谷がB Cへ下降してくる。

C 2へのルートワークでグラマリは充分ルート工作要員として動ける事が解り、彼の了解を得てルートワークに入ってもらふ事になる。

C 2 (4,700m)～C 3

7月4日 C 1移動、B C休養

B Cで1日休養後、飛田・グラマリ・フセインがB Cを出発しC 1入り。7月5日 C 1→C 2上部、C 1移動

3人でボロボロリッジを登り、反対側の下降路に4本のロープをフィックスしながら再度ヤズギール氷河に立つ。キャンプサイト作りをフセインに頼みグラマリと上部に向う。B C～C 1間同様にヤズギール氷河と右岸とのコンタクトライン沿いだが、フィックス・ロープが必要な所が何ヶ所か出てくる。さらに氷河内、数十米のアイスフォール帯の中に入ったりする。傾斜が一旦緩やかになり、ヤズギール氷河の上部からアップパー・ヤズギール氷河の端らしき氷河が見える。キンヤン・キッ

シュは望めないが、プマリ・チッシュと左手に6,820m峰とその側壁、懸垂氷河を抱いた風景は、グラマリにはあまりにも強烈だった様子だ。奥さんと7人の子供と両親を養ってるのだと云う彼の気持ちが痛いほど解る。飛田とならルートワークも一緒に行くと云っていたが、田村の意見を聞きたいという。飛田はどうせ行くのだから聞いてもしょうがない、田村ならヒョットしたら危険だから止めようとするのではないかと、といった気持ちらしいのだが、田村は飛田より過激なのを彼は知らない。

B Cから移動して来た3人とC 1合流する。

7月6日 C 2移動及び上部偵察C 1→C 2

上部を田村に見てもらふ必要が出来たので、3人はC 2を設営し上部へ。他の3人はC 2へ荷上を終えC 1へ。

昨日の最高到達地点に立った田村が行くのか止めるのか決めかねている様子に、グラマリは行く事に決めた様子だ。午後のC 2上部のルートは氷河内が融け、氷塔に付着しているドロ・落石の危険なルートになってしまい緊張病等でC 2に戻る。

7月7日 C 2→C 3サイト、C 1→C 2

C 1との交信で昨夜から不調だったフセインは



▲C 2～C 3間の氷河のコンタクトライン

▼C 3 プマリ・チッシュ(左)とキンヤン・キッシュ



下痢で本日は休養。大谷・寺沢がC 2への荷上げを行ないC 1へ。フセインの調子が戻ったので、今後の計画の為に寺沢のみC 2へ移動する。

飛田・田村・グラマリは途中、ロープを固定しながらC 3への荷上げを行なう。昨日迄の最高地点を過ぎ、C 3手前でやっと目指すキンヤン・キッシュを望む事が出来、気持ちも新たにしている隊員とは反対に、登下降ルートの嫌らしさにグラマリは一層気落ちしている様子で余りにも気の毒だ。キャンプサイトを作りC 2に戻ろうとした時、6,820m峰側壁の懸垂氷河の一角が崩壊し雪崩が発生したのを見てしまいさおさらだ。

C 2に戻り、飛田・田村、そしてC 1より移動して来た寺沢を交え、グラマリと我々の今後について話し合う。家庭の事をひたすら気遣っている彼には少しでも危険を回避させる為にも、日本で計画した様にルート工作は隊員、荷上げの主はHAPに依頼するといった計画の原点に戻る事にし、明日飛田・グラマリでC 3移動、翌日C 4へのルート工作计划を中止し、再度体制を整える為に全員一旦BCへ下降する事に決める。

7月8日 C 2→BC、C 1→BC

BCには、イスラマバードの督永さん、娘の紋子ちゃんと恵子さんより手紙・新聞・雑誌等が届いていた。久振りに嬉しい出来事だ。手紙には、冷たいビール、ウィスキー、日本酒、焼魚、焼肉、ステーキ、天ブラ、オシンコ…何んでもあるので、早く帰ってきー、と書いてある。早く冷たいビール・オシンコの待つイスラマに帰りたいが、まだ帰る訳には行かない…。

7月9日～10日 BC休養

C 3 (5,000m) ～C 4

7月11日 BC→C 2 BC休養

大谷・HAP 2名はC 2入り。飛田・田村・寺沢はBC休養

7月12日 C 2→C 1 C 1→C 2

飛田・田村・寺沢はC 2入り。ステージ計画はC 3を設営後、C 4へのルート工作・荷上げをし、C 3で休養し、北稜上のC 5予定地へルート工作と荷上げを終えた後BCへ下降することにする。

7月13日 C 2→C 3、C 2→C 3

全員でC 3に入り設営後、大谷・寺沢・グラマリ・フセインは危険的要素の少しでも少ない午前中に移動する為に早々にC 2へ下降。

飛田・田村は上部の偵察へ向う。中央のヤズギール氷河はアイスフォールが乱立し、その上部にアッパー・ヤズギール氷河の端、中央部が一番低く左右に高く弓形状に望める。一番低くなった背後にプマリ・チッシュ、右手にキンヤン・キッシュ主峰から北峰、左手には6,820m峰とその側壁が望め、下部で見たより威圧感が強い。明日の偵察は、先ずアイスフォール帯に入り、ダメな時は氷河と右岸側壁のコンタクトラインの雪面をルートにする。

7月14日 C 3上部偵察、C 3へ移動と荷上げ

朝C 3を出発しアイスフォール帯へ入るが、アイスビルディングの迂回、クレバス帯、クレバスによって生まれる小氷塔群帯とピッケルとバイルのコンビネーションで登って行くが、ルートとしては無理と判断し、左手の雪面に移動する。途中懸垂氷河の一面が崩れ落ちてくるが難をのがれる。太陽の日差しを受けて側壁から、次はビュー



▲6,820m峰側壁の懸垂氷河崩壊による雪崩

▼C 4 下部アイスフォール帯の通過



ン・ビューンと落石、クレバスの多い当面を登る。氷河とのコンタクトライン沿いに尾根を回り込んでアッパー・ヤズギール氷河に行けそうに見えたが時間も9時になり自然の様子が解らないので偵察を終えC 3に戻る。C 3には、大谷・寺沢が移動して来ており、HAP 2人はC 2へ。どうした訳かHAPは今回のステージ用の主食を2人共上げていないと聞かされる。連絡官は、登山初期から自分もC 4迄行きたい、6,000mを越えたいと云っているが、ルートが伸びる毎に行かせろ、とうるさい。

7月15日 C 3上部偵察、C 3荷上げ

隊員全員の同一行動を避ける為に寺沢はC 3ステイし、BCとのコンタクト。以後寺沢には、C 3でBCのコンタクトと管理をしてもらう。

飛田・田村・大谷は、C 4へのルート工作と荷上げを兼ね、2時半起床、4時出発、日明りの中ヘッドランプを灯して行動をする。懸垂氷河下部を通過する時は「無事、通して下さい」と念じる様に、さらにスピーディーな行動をして昨日の最高到達地点へ。昨日行けそうに見えたルートは行けず、一旦尾根に登りリッジを回り込む、回り込んだ斜面は北西面の為に雪面がクラストしており、所々に青水も出てくる。足首の痛くなる左上トラバースが続く。頭上には岩稜と雪面が青空に向かって光り輝いている。トラバース後、緩やかな雪面が続く、段差の付いた安全地帯で田村・大谷を待つ。この先、緩やかな斜面のまま行くとアッパー・ヤズギール氷河に上れそうだ。時間的に下降を考えると上部への行動、又、2人共疲れている様子なのでC 3へ戻る。高差約900m。

C 4の位置は、アッパー・ヤズギール氷河に上った地点、そして一旦下降し東壁下へ登り返し東壁下へC 5、北稜上へC 6とキャンプを1ヶ増す事になりそうだ。

田村は疲労気味、大谷はイマイチ体調が不安定で、我々の様な実動隊員が少ない時は弱みになる。飛田も明日レストにする。

7月16日 C 3休養 C 3へ移動

C 3の高度5,000m、テント下の氷河の流動は解るものの、自然的驚異からは安全な場所。すぐ近くに水も流れ、のんびり出来る場所だ。

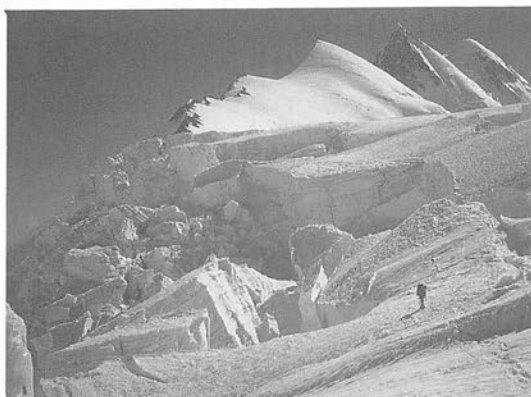
HAP 2人がC 3へ荷上げ、移動してくる。

7月17日 C 4移動と荷上げ

4時、寺沢に見送られて5人は出発する。途中キンヤン・キッシュ北峰、ディスタギール・サールが朝日に輝き始めてくる。カリカリのトラバースにはHAPもかなり緊張してついて来る。昨日の最高到達地点のデポ品はそのままとして緩やかな雪面を登って行くとアイスフォール帯に行く手を阻まれてしまうが、ルートはここ以外になさそうだ。アイスフォールの崩壊、雪面の危険を感じながらも新雪に変わったアイスフォール帯へ入り、途中の安全地帯に集結。フセイン、そして大谷も遅れて来る。すでに10時を過ぎている。安全に下降させる為に3人を下らせる。

田村と今度は空身の状態でルート工作する。クレバス、雪面、アイスフォール帯にルートを左、右に取り最後は門状のアイスビルディングの中、ツララの恐怖の下を抜け、やっと待望のアッパー・ヤズギール氷河へ出た。

全部のデポ品を2回に分けて荷上げし、C 4を設営する。C 3の寺沢も喜んでくれる。



▲アイスフォール帯を抜けアッパー・ヤズギール氷河へ

C3では、大谷とフセインが頭痛の為、薬を服用して寝ている。

7月18日 C4↔逆ボッカ、C3より移動
心配していた大谷も調子を取り戻した様で、計画通りにグラマリとC4へ移動してくる。飛田・田村は、一昨日の最高到達地点へ荷上品の回収をする。C4迄の荷上のフセインは、単独行動が無理なルートで行動出来なくC3スティ。

今日も天気は良く、アッパー・ヤズギール氷河を囲む山々の展望は素晴らしい。

7月19日 C4→BC（全員）

大谷は昨日の午後不調になり、一旦良くなった様子だったが、今朝は不調、明るくなるのを待ってグラマリとC3、そして本日食糧不足からBCへ下降する寺沢・フセインと合流してBCへ下降させる。

計画では、飛田・田村は東壁下へC5設営して移動、大谷・グラマリはC5への荷上げだったが移動は無理となってしまう、荷上げをしてC4へ戻る事に変更したが、昨夕から崩れ出した天候は徐々に悪くなりだしている。キンヤン・キッシュ、デスタギール・サールに笠雲のかかるのを目にしながらかBCへ下降する事にした。

C3～C2間の氷河内で寺沢が転倒し、今日はC2泊と思われたが何とか頑張り、夕方にはBCに全員下降した。

7月20日 全員休養

朝から雨になっているが大きな崩れにはならず午後には回復してくる。トランプ仲間が増え連絡官はご機嫌。

寺沢は、転倒強打した腰と腕をかばいながら、幼少の頃を思い出してアルファー化米作りをする。

7月21日 BC休養

昨日メステント内に持ち込んだケロシNSTOPが好評で、思い思いに湯を沸かしたり暖をとりながら読書をしたりして過ごす。

7月22日 BC休養

曇天のため乾燥してα化を試みている飯が今ひとつパリッとしなない。

最後となる次ステージは、C5からC6へのルート工作・荷上げをし、C3に下降して休養後、C3からアタック体制に入る。メンバーは飛田・田

村そしてC6までのサポートにグラマリの3名。
大谷・寺沢・フセインはC3に待機。

C4（6,150m）～C5～上部行動断念

7月23日 BC→C2 BC休養

アタックメンバーの3名はC2へ移動。C1～C2間のロープが氷河の流動で切断されている。

7月24日 C2→C3 BC休養

C2での朝焼けが何とも不気味だったが、C3の手前から降雪が始まる。今迄にない悪天周期に入った様だ。

7月25日 C3、BC共に停滞

悪天のため停滞。BCも終日雨。

7月26日

C3は雪、BCは雨。

7月27日 C3、BC共に停滞

雨や雪は止んだものの、C3から上部は雪崩の危険性が高く、本日も停滞。従ってBC組もBCに停滞する。昨日の雨でBCは水びたしのテントだらけとなる。

7月28日 C3、BC共に停滞

本日もC3停滞。BCでは連絡官が悪天による道路決壊を恐れて、登山を中止しろとうるさい。

7月29日 C3停滞 BC→C2

C3は停滞。BC組3人は重荷でC2入り。ルートは大きく変化している。夜はまたしてもC3は雪C2は曇となる。

7月30日 C3停滞 C2→C3

飛田・田村は上部偵察。大谷組はC3移動。全員C3へ終結したものの、夜半激しく雪が降り出し、明日のC4入りはまたしても不可能だ。

7月31日 C3停滞

C3の滞在が長くなり、BCで立案した計画の遂行は無理となる。C3に休養に下る時間は無くなり、チャンスは1回だけになる。そうなると中途半端な天候・降雪後に行動すべきではなく、天候の安定、プラトー～東壁の雪の状態等を含め、我々の体力のロスを最小限に押え、ワン・トライを確実にする為に、いら立つ田村を説得し、天候の安定と降雪の安定を待った。精神的苦痛の毎日だった。終始悪天に晒されていた訳でないのをおさらだった。

8月1日 C3→C4 C3滞在

グラマリはC6までのサポート、3人の内誰か1人でも不調になったら下降する事を再確認し、大谷達に見送られてC3を出発しC4に入る。

8月2日 C4→C5

3人共パンパンになったザックを背重い、アンザイレンして飛田・田村・グラマリの順に夜明けのアップー・ヤズギール氷河をクレバスを避け、ヒドンクレバスを探りながら最低コルへ約100米下る、プマリ・チッシュを回り込み徐々に高度を上げ、遂にキンヤン・キッシュを正面に見て行動する。ビデオを回し写真を撮りながらのルート工作もイキが切れてしまった様だ。途中で半分程荷物をデボする。

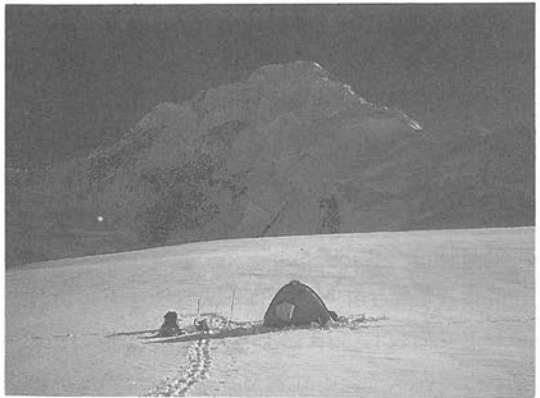
田村がトップになる。雪崩の危険もあり、東壁下若干手前にC5を設営した。休憩後飛田一人でデボ品の回収をするとすでに夕暮となる。

8月3日 C5 (6,450m)～上部行動断念

飛田・田村は北稜上C6へ移動、グラマリはC6への荷上げを行ないC5のテントへ戻る計画で、昨日同様のオーダーで出発。

2～3ヶ所のクレバスを迂回した後、目で追っていたドッシリとしたスノーリッジを目指して一直線にプラトールを進みリッジに取付く。ノーザイルでラッセルを繰返して行く。高度が上がらない割に時間だけが過ぎて行く。下で見ていた以上に人間が余りにも小さすぎ、今更ながらヒマラヤのスケールの大きさを体で味わう事になった。

昨日の後半同様に体が重くなり行動が鈍くなる。このままC6に宿泊するのが不安にもなり、田村に伝える。田村はとりあえず中間部にあるアイスフォールの先まで行って来るとグラマリと行くが、



▲C5 (6,450m)とキンヤン・キッシュ東壁
右手のスカイラインが北稜。東壁右手のどっしりしたスノーリッジを登り、中間のアイスフォールで断念。

結局下迄で戻って来る。K2が見えたとか。C5へ戻る。

8月4日 登山活動断念 (6,700m)

日程、食糧からもアタックは無理になってしまい北稜まででもと再度向かうが、飛田は昨日同様に体が重い。田村も昨日の最高到達地点で行動を止める事にし、上部への登山活動を断念した。C3出発以降早朝からコンタクトしてくれている寺沢に断念を知らせる。

最高到達地点で今日はK2は望めなかった。C5に戻るとキンヤン・キッシュはガスの中に入ってしまった。

8月5日 C5→C4

昨日からずっと雪が降っているが、かすかにトレースがあり、バテバテの体・重いザックでC4に戻る。

8月6日 C4→C3

C3へ下降。

C3～BC

8月7日 C3→BC

C5の下降からC3迄、荷下げに再度上る事は不可能。またC3～C2間はかなり危険な状態なのでHAPにも荷下げによるピストン行動はさせたくない。とにかく1日だけの行動で6人共BCへ戻る事にせざるを得ないので、背負えるだけ背負う事となり、持ち帰るものにも限度があり、4人共かなりの個人装備を処分する事になってしまった。



▲アップー・ヤズギール氷河～C5へ

やはりC3～C2間はズタズタとなり、新たなルートを探りながら危険地帯から脱出した感じで、夕方、何とか全員BCに着く事が出来た。

(記 飛田和夫)

帰路キャラバン

8月10日 BC～Shimshal

昨夜遅くまでポーター達が大宴会をしていた。テントを撤収しよいよ帰る時が来た。昨日、サダーとみんなで荷の計量を済していたのだが、リエゾンがハリキッて計量している。はっきり言って迷惑に近い。7時出発、9時にヤズギール氷河の横断に入る。往路には気が付かなかったが、ポーター達はビニール靴で歩いている。これでよく重荷を背負い氷河を歩けるなぁと感心してしまう。雲一つない天気ですら暑いのに高度を下げるとさらに暑い。13時前にシムシャル村に着き木に成るアプリコットを食べる。熟れていてとてもうまい。ポーター達もなかなか到着しないし、腹は減るしで、アプリコットをひたすら食べる。すでに山乞食状態だ。15時半やっとラストの飛田さん達が到着。キッチンボーイが日射病で倒れてしまったらしい。

8月11日 Shimshal～Ziarat

昨日のこともあるので今日は早出をしよう、と打合せをしていたが、いろいろあって結局7時出発となってしまった。河原を歩き巨大化しているマメをこらえひたすら歩く。マラングッティ氷河は横断せず河の対岸に渡る。この頃すでにへろへろで足がなかなか前に出ない。16時半にやっとの思いでジアラットに着く。テントを建ててもらい中に倒れこむ。日射病だ。今日は自分になってしまった。飯も食えず、ぶっ倒れたまま寝る。

8月12日 Ziarat～Passu

5時40分少しでも早く出発の方が良い。自分と田村さん、リエゾンの3人が先行する。ゆっくり歩き10時半にドットに着く。ここでチャイを馳走になり再出発。1時間でシュガーダンに着く。対岸に渡りへたりこんでいると飛田さんの罵声がとぶ、またやってしまった…。ポーター達の賃金精算を済せ、トラクター、ジープと乗り継ぎ(道が崩壊してしまいジープが入れない為)パサーへ。

こうしてキャラバンは無事に終わった。パサーでジープをチャーターし、夕方にスストまで買い物に行く。なにを買ったかはみなさんの想像にお任せます。

(記 大谷日佐夫)

8月13日 パサー～ギルギット

昨日のジープでギルギットへ。折悪くトレッキングシーズン最盛期となり宿の確保に少々手こずる。夕方イスラマバードまでの車のチャーターを巡って一悶着あり。

8月14日 ギルギット～イスラマバード

グラマリ達の尽力で、エアコン付コースターを格安でチャーターし、一路イスラマバード目指して早朝発つ。途中バルシン～ベシャム間のカラコルムハイウェイ上のカーブの出合頭に、我々の車と大型バスが接触、田村は右腕に十数針縫う傷を、寺沢は左手親指関節にヒビを負う。揚句の果て大雨で道路決壊などのため、ベシャワール経由の迂回を強いられ、その上車のサスペンションに異状をきたし代替車を求め、イスラマバードに帰り着いた時にはとくに日付が変わっていた。

その後諸事情のため8月27日までイスラマバードに滞在したが、心配した田村の傷も回復し、予定通りの便で全員帰国した。(記 寺沢玲子)

登山活動断念の記

C4完成後、7月23日隊長・田村・グラマリの3人はアタックへ向けBCを出発。24日C3に入ったが、この日から天候崩れ、31日まで停滞を強いられた。大崩れと言えないあいまいな天候の下、じりじりとした7日間もの足止めは心身ともに辛いものであった。8月1日、ようやくC4へ上る。なんと、ここからようやく後半の6,000m代の登



▲最高到達地点となったアイスフォール(6,700m)

山が始まるのだ。東壁下まで1日、さらに北稜上まで1日、アタックに2日という、一気に通さなければ登頂はない—発勝負の作戦がたてられた。グラマリは北稜上までサポート、3人中1人でも不調なら中止下降という付帯が付いた。

8月2日、予定の荷を大幅に削りC4を出、午後遅く東壁下手前にC5を張る。このクレバスを縫っての雪原のルートはこれまた長く、消耗を強いられた。隊長は食欲がないうえトイレが近く、明らかに不調が見えていた。そしてここでようやく我々は、キンヤン・キッシュの全容を見た。8月3日、北稜上のC6建設をめざし雪原を直線的に進み、登りにかかってしばらくして隊長とラッセル交代。脇で雪崩が2回もある。9時ごろ中間あたりらしいセラック帯の下に着く。隊長遅れる。登攀ピッケルがあがらず、今日のC6上の宿泊に懸念があると隊長表明。荷をデボし、3人ともC5に降りる。

8月4日、登頂は断念。ただしC6までは可能なら行ってみようと、再び出発。隊長遅れる。グラマリとデボ地点に達したが、彼はこれ以上上に行く意志はない。打ち切り決定。6,700mであった。この上、北稜上までは目の前のセラックにロープを1本使えばあとは容易に達しよう。そこから頂上までの高差800~1,000mは大雑把に5段からなっており、頂上直下の垂壁が要点となろう。

なぜ登れなかったのか？アプローチの段階で体力、気力とも使い果たしてしまった。C4までの長く、しかも連続した絶悪なルートの往復は体力的にも気力的にも大きな負担であった。後半部C3以上で行動できたのは3人であり、パーティ編成に余裕がなかった。BCのリエゾンと2人の高所ポーターは早く帰りがたり、なんだかんだと厭戦気分をもたらした。50前後の2人が相手とあっては前途に不安をいだくのも無理からぬことか。絶対に事故はご法度—当然のことだが—という世俗の事情が少なからず負担となり決断を悩ませた。

こうした事情から、隊長、そして寺沢さんの苦労は察してあまりある。一方私田村といえば、なりゆきにまかせるばかりで気楽なものであった。ひとつのとりえといえば、個人的なもののだが、期間中通しての旺盛な食欲であった。ほとんど食い

物の事ばかり考えていた。

こうした長い厄介なルートは中高年には不向きだと出発まえ人に言われた。その通りである。一方で、よくぞ北稜下の未踏地域にまで入れたものだと誇らずにはいられない。7,000m級の数々の峰々に囲まれた広大な氷河の涵養地のありさまはまさに仙境であり、峰々の鞍部越しに望むバルトロの峰々も忘れられない。最挑戦したい山である。

(記 田村 正勝)

初めての高所登山

ヒマラヤなんて自分には無縁だと思っていた。そりゃ一度は行きたい、登ってみたい、という気持ちはあったが、サラリーマンでは……。

そんな時に、自分が所属している山岳会が幹事役でヒンズークシュ・カラコルム研究会があった。その研究会後の懇親会の中で飛田さんと知り合うことになる。この時、今回の遠征の話を出され、酒の入っているのもあってか、一気に気持ちが爆発してしまう。自分1人決めてしまっのはいいが、家のこと、会社のこと、考えると頭が痛い毎日が続いた。それでもなんとか親を説得し、会社から休暇をもらい遠征に参加することが出来た。

BCに入り登山を開始する前に、ミーティングで隊長から改めてというか、だめ押しというか、高所登山について一言があった。高所登山とはスポーツなのだろうか？いや違う、それでは何だ？思わず自問自答してしまう。

登山が開始してC1、C2、C3と高度を上げると高度障害が出てくる。本、雑誌等で予備知識を頭の中にたたきこんだつもりだったが、いざその場になると、まっ白になってしまってみなさんに迷惑をかけてしまった。結局、自分は6,000m台に1回上っただけになってしまって、つくづく体力不足と知識不足を痛感してしまう。

この次はきっと…と思ってはいるがこの次はいつになるのか自分でも分らない。日本に戻りすっかり会社人間に戻ってしまった自分に次はあるのだろうか？ああパキスタン楽しかったなぁ、チャapati食べたいなぁ、と思う日数が日増しに多くなる。今度はいつ爆発してしまうのか、自分でもちょっと怖い。

(記 大谷日佐夫)

ネパール・ヒマラヤ雪崩死亡事故

例年ならば、絶好のトレッキング日和が続くはずのネパール・ヒマラヤに、時ならぬサイクロンの影響で雪崩や土砂崩れが発生して62名が死亡した。(11月18日ネパール救援対策本部発表。)

その中には、ゴーキョ・ピーク周辺の13名と、カンチェンジュンガ周辺の3名の日本人が含まれており、日本中に衝撃が走った。ゴーキョ・ピーク事故の概要とその背景をまとめてみた。(文責：山森 欣一)

■トレッキングの概念

現在ヒマラヤで実践されている行為は多種多様である。当然のことながら「トレッキング」と一言で表現されている行為も幅の広いものである。だが、アイゼンとピッケルが必要で登頂をめざす行為は標高の高低とはかかわりなくトレッキングではなく登山である。

しかし、トレッキングの基本は「山歩き」であるから、いくらアイゼンやピッケルを必要としないからといって標高5,500mの頂上に行くのに岩壁や鋭い稜を登攀する行為は、トレッキングとはいえない。これは登山である。

トレッキングを大雑把に分類すれば以下のようになる。

- ①アイゼンやピッケルを必要とする峠を越えたり、氷河や斜面を通過するコース
- ②アイゼンやピッケルを必要としないが、コース途上に懸垂氷河など万年雪があるコース
- ③アイゼンやピッケルの必要もなく、コース途上に懸垂氷河など万年雪がないコース
- ④ポーターを雇用しない。
- ⑤ポーターは雇用するが現地ガイドを雇用しない。
- ⑥ポーターも現地ガイドも雇用する。
- ⑦添乗員がいない。
- ⑧添乗員がいる。

ゴーキョ隊のケースは、③-⑥-⑧である。

■ゴーキョ隊の概要〔募集：ヒマラヤ観光開発〕

- 1) 死亡者〔入沢邦夫(67) 山田栄一(66) 兼子俊一(65) 田辺史(65) 村山伊吉(58) 大木磐(57) 石井恵美子(57) 波多野英男(57) 水野晴之(57) 梶原達男(53) 小森敬司(51) 大石光和(47) 中村隆之(38=添乗員) この他にネパール人10名〕
- 2) 事故日時〔1995年11月10日午前8時半頃〕
- 3) 事故場所〔ゴーキョ・ピークの麓にあるパン

カ(Pangka) 4,700m付近〕

4) 直接原因〔雪崩によって宿泊中のロッジが押しつぶされた。後日現地人3名が救出された。]

5) 添乗員を除く12名の平均年齢：〔58.3才〕

60才台=4名 50才台=7名 40才台=1名

6) 行動概要：報道を総合すると、ゴーキョ・ピーク隊は、添乗員を含めた14名で10月29日カトマンズ入り。ナムチェバザールからドーレ、パンカ、ゴーキョを経て11月5日にゴーキョ・ピークに登頂し展望を楽しみ15日には帰国する予定であった。しかし、参加者の一人であったブライアン・ウィリアムズさんによれば、「11月7日夕、パンカで右ひざじん帯に重傷を負い8日朝、ヘリでカトマンズまで引き返した。(読売新聞13日夕刊)」と話しているので、同パーティの日程は予定より遅れていてこの災難にあったものと思われる。

■ゴーキョ隊のケース

今回のゴーキョ隊の場合は、例年なら山岳景観を楽しむには絶好のシーズンにアイゼン、ピッケルなしで万年雪もない場所で、「グループ・バック・トレッキング(尾崎啓一著トレッキング・ザ・ワールドP37~39)」を楽しんでいたのである。

このようなケースの場合、誰れもが高山病対策さえ慎重に行えば、楽しいトレッキングを楽しめると考える。また、多くのトレッキングを営業としている会社でも各種パンフレットなどでもそのように説明している。

そこに時期外れのサイクロンが発生し、大量の雨が降り、万年雪のない生活圏である「里」にも異常な降雪をみたのである。そして、その雪が雪崩となってロッジを襲ったのである。

この場合、現地の住民も、添乗員も、参加者も事前にこの異常降雪を予想することは困難であったと思われる。

行動の詳細はわからないし、異常降雪があった

後の対応ができたのかどうか不明であるが、朝食中の事故などの報道が正しいとすれば、時間的にはなんらかの判断が出来たのかも知れない。

また同じ「グループ・バック・トレッキング」であっても②のコースに行くトレッキングは、登山と同じように「雪崩」対策が必要なことは、当然のことである。

■新聞報道第一面の実態

今回の死亡事故は、死亡者の数の多さから、新聞各社も第一面で報道したが、その見出しはまちまちであった。以下各社の主な見出しである。

(朝日)雪崩で13邦人ら26人遭難／エベレスト山群ツアー中／山小屋を直撃／明大など山岳部OBら
(読売)ヒマラヤ 雪崩で邦人13人絶望／宿泊の山小屋直撃／明大OBツアー客ら

(毎日)ヒマラヤで雪崩26人絶望／日本人は13人／明大OBら山小屋ごとのまれる

(東京)明大OBら26人死亡／エベレストで大雪崩山小屋を直撃／観光登山、邦人13人と現地ガイド

情報のほとんどない状態では、事故の発生時刻は行動を推測するに当っては貴重な要因となるが、朝日と読売の10日午前8時半に対して、毎日と同じ10日でも午後8時半、東京にいたっては11日午前1時である。これでは一紙だけ読んでいたのでは誤った判断をするだけである。そのニュースソースも各紙まちまちで、朝日はネパール政府、読売がニューデリー特派員、毎日はカトマンズのビナヤ、東京はロイターである。

■社説のもつ意味

この死亡事故に関して朝日新聞と読売新聞が14日付の社説でとりあげた。第一報以後、各紙とも現地に記者を派遣して情報が紙面に載った。このような事故は検証や解説記事などが、適当な時期に他の紙面に掲載される。社説はそのことを踏えて、建設的な主張をのせてもらいたいと感じた。その中にあったは、朝日の「いたずらにしりごみばかりしては、得られる物も得られない。自分の責任で旅を楽しむのに遠慮はいらない。」との主張が光った。朝日はこの分野で一步前進したのかも知れない。

■カンチェンジュンガ隊の概要

- 1) 募集〔アルパインツアー〕
- 2) 死亡者〔11月10日 藤原功(60) 河田祥志(45) 13日 滝本啓一(69) この他ネパール人4名〕
- 3) 事故日時〔1995年11月10日午後2時ごろ〕
- 4) 事故場所〔カンチェンジュンガ北面BCであるパンベマ5,000m付近〕
- 5) 直接原因〔テントを張ろうとした時に雪崩に襲われた。滝本は救出されたが、その後衰弱死したものの。〕
- 6) 添乗員を除く日本人の平均年齢〔53.9才〕
70才台=1名 60才台=4名 20~30才台=2名
- 7) 行動概要：報道を総合するとカンチェンジュンガ隊は、添乗員を含めた9名で11月1日カトマンズ入り。カンチ北面のグンサまでヘリコプターを使用して入山。12日にカトマンズ帰着の予定だったが音信がなく、ヘリコプターで捜索し発見された。食糧も雪崩に埋ったため食事制限をしながら救出を待っていたもの。

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(高地アジア含む)の各地域の社会情勢・現地事情(入山事情)の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc…………。

ヒマラヤ及び高地アジアに関する地域なら何でも結構です。“記録”だけではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6~8枚程度、写真3~5枚、横書きをお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、計画書をご送付下さい。各方面からの問い合わせ用に使用します。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★ 送り先 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会機関誌編集部 TEL 03 (3988) 8474 FAX 03 (3988) 8502

地域ニュース

《中国》

2人のパンチェン・ラマ11世

中国筋が11月9日明らかにしたところによると、中国政府はチベット仏教ナンバー2の指導者、パンチェン・ラマ10世（1989年1月死亡）の「生まれ変わり」を近く正式決定する。同仏教の最高指導者でインド亡命中のダライ・ラマ14世は5月、すでにチベット族の少年、ゲドゥン・チョエキ・ニマ君（6）をパンチェン・ラマ11世として認定しているが、中国政府の転生候補者のリストにはこの少年は含まれておらず、2人の「11世」が誕生することになる。中国政府の認定に対して信仰心の強いチベット民族が反発する可能性も高く、くすぶり続けたチベット独立の動きが再燃する可能性も出てきた。

同筋などによると、中国当局はチベット仏教の高僧ら75人をチベット自治区から北京市内の軍関係のホテルに集め、3人の候補者の中から転生者を最終認定する作業を開始し、中国共産党統一戦工作部が10月に了承したもの。

同筋は、江沢民国家主席が韓国訪問と大阪でのアジア太平洋経済協力会議（APEC）出席のため北京を離れる13日までに決定する可能性もあるという。

6年前にパンチェン・ラマ10世が死去した直後から、チベット仏教界をあげて宗教儀礼に従った転生者の認定作業が始まり、今年初め最終段階に入ったが、その矢先に情報がダライ・ラマ側に伝わり、先に転生者を発表されてしまい、中国側が対応を急いでいた。

伝統的にはダライ・ラマとパンチェン・ラマは一方が死去した場合、もう一方が複数の候補者の中から転生者を認定する習わしになっているが、中国政府は死後ただちに「転生者の最終認定権は中国政府にある」と宣言。ダライ・ラマが11世を認定したことを「中央政府の権威を否定し、祖国を分裂させる行為」として無効を主張していた。

チベットに世界一高い空港完成

チベットのバンダ（4,334m）に、昨秋新空港が開港した。これまでの世界最高所にある空港は、ボリビアのラパス（4,058m）だったが、バンダ空港はこれを凌いで世界最高所の空港となった。昨秋10月から成都からの定期便としてボーイング757が就航している。

ラサ付近に民族センター完成

ラサの西方20kmのXiongbaleに、民族センターが完成した。観光客は村の周辺で馬やヤクに乗ったり、牛皮製のボートを漕いだり、アーチェリー大会に参加したり出来る。また、寺院やチベット式の結婚式を見学したり、自らチベットン・ティーを作ったり、チベット食を味わったりと、チベット人達の生活を体験出来る。

もうひとつ興味を引くものは、木枠で囲われた泉である。聖なる泉として知られるその泉は54ヘクタールの農地を灌漑している。この泉は8世紀にチベットに招かれた仏教僧によって掘られたものである。

《インド》

喫煙登山者に告ぐ

生理学総合研究所がラダックなど高所に駐屯していた兵士達の調査をしたところ、喫煙兵はそうでない兵士達と比較すると全く同等の食料事情下でありながら、体力の減少や高血圧、ビタミンAやC、タンパク質の体内摂取状態が劣ることが明らかである事が判明した。

遠征に新鮮な野菜を

タミル・ナドゥ農業大学農学部で野菜の鮮度を保つ実験を行ない、人参、トマト、玉ネギ、ニガウリ、チリ等を10～12日間保存する事に成功した。

保存する野菜1kgに対して10gの塩化カルシウムをガラスビンに入れ、野菜と一緒にポリ袋に密閉し、室温で保存する。鮮度も保たれ、野菜の色も香も損なわれないし、この方法だと野菜を干す

必要もない。費用も10kgあたりわずか8ルピーしかかからない。
(ヒマヴァンタ)

中印国境警備隊 相互撤退協定成る

中印国境紛争議決に向けて、第8回中印会談のためデリーを訪れていた中国代表团(団長タン・ジア・シュアン外務副大臣)との会談のあと、インド外務次官マルマン・ハイダール氏は記者会見し、4,060kmに及ぶ中印国境(ヒマラヤ地域)での両国軍隊の衝突(1962年10月)以来初めて、紛争地域(アルナチャル・プラデシュ州)から相互に軍隊を引き離すことに合意したと語った。

ガングスタンに登頂

ガングスタン(6,162m)の登頂を目指していた、会津山岳会女子登山隊(佐藤澄江隊長ら4名)は、8月11日隊長と大竹尚子、田部久美子、押田礼子の全隊員が南西稜から登頂に成功した。

《パキスタン》

パキスタンと中央アジアが直結

カラコルム=ハイウェイがフンジェラブ峠を越えてシンキャンからアルマティ、ビシュクへと延ばされる予定である。又、バルティ地方のチャマン〜タジク共和国のブシュカ間は、アフガニスタンのカンダハー〜ヘラートを經由する約800kmの鉄道で結ばれる計画である。建設予算は6億ドルの他に、更にクウェッタからチャマンを繋ぐ鉄道建設費1億ドルが加算され7億ドルとなる。しかし、財政難やアフガン情勢のため、計画遂行が遅れる見込みである。

インフォメーション

第17回インド・ヒマラヤ会議

HAJ主催の恒例のインド・ヒマラヤ会議を群馬県山岳連盟と共催して下記のとおり開催します。

記

日時：1月27日(土)14時〜28日(日)正午

場所：群馬県青少年会館 前橋市荒巻町2-12

☎ 0272-34-1131

JR両毛線「前橋」駅下車タクシー20分

参加費：9千円(一泊二食、懇親会費、資料代込)

定員：60名

申込先：郵便振替 00100-6-48954

日本ヒマラヤ協会

通信欄にインド・ヒマラヤ会議参加費と記入

内容：1995年インド・ヒマラヤ総括と許可取得から出発まで(事務局)

登山報告 ラダック[サラシュワ]、カシミール[ヌン]、ガンゴトリ[サトパント]、シッキム[シニオルチュー]、ヒマチャル[ガングスタン]などを予定。

現地情報と情報交換

ヒマラヤから

チョー・オユー便り

カトマンズに帰ってきました。チョー・オユーは私の他に5名(沢田石順、佐々木延介、上野幸人と畠山正昭、田中敏雄)が登頂しました。ルート工作はすべて先行した法政大学隊によってなされてしまい、充実感はありません。

登攀隊長として隊の登頂が優先で酸素レスへの挑戦もできませんでした。八千M峰はその高さ自体が困難ですが、私の好みではありませんでした。

10月17日 カトマンズにて 伊藤 清春

ダウラギリ便り

秋たけなわの候皆様にはお変りないことと存じます。さて私ども雪豹同人登山隊は、おかげ様で10月6日隊長近藤和美以下、桑原、林、武田の各隊員とシェルパ2人がダウラギリ(8,167m)の頂上に立つことができました。

今後ともよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

10月24日 労山雪豹同人登山隊

Books

雪域神山

中国登山協会と西藏 登山協会が編集し、西藏人民出版社から出版された「山の写真集」である。オールカラー。写真点数157枚。地形図数16枚。グレート・ヒマラヤを中心にチベットの山々が紹介されており、山によっては角度をかえて紹介している。特に今回初めてお目にかかる写真もあり、「こんな山もあったのか」「この山なら登れる」と驚いたり、喜んだりしながら楽しめる写真集である。話題のチョモランマもさることながら、近くにあるタンガロン・ラ（6,662m）やニエンチェンタンラ山群でも東にあって手つかずのカジャチャオ（6,447m）ガネッシュに近い、ジーロンのランボ・カンリ（6,668m）などは、すぐにでもとんで行きたいような山である。地形図の中には、未踏峰であるチョブ・カン（7,048m）、ルンボ・カンリ（7,095m）、セプ・カンリ（6,956m）などが含まれている。巻末には中文と英文で位置や撮影年も記載されている。ヒマラヤニスト必携の一冊である。

※巻頭を飾るチョモランマ、ローツェ、マカルーの空撮写真は裏焼きになってしまったのが残念である。

A 4変型版 237頁。送料込み 6,500円

希望者集り次第発注のため、購入希望は代金を郵便振替で00100-6-48954 日本ヒマラヤ協会宛送金して下さい。雪域神山希望と記入。到着までは2ヵ月位いかかります。

パキスタン北部・パミールの3つの峠

1994年夏、神奈川ヒマラヤクラブの10名が、ヒンドークシュのヤルフーン川を辿り、ボロゴル峠（3,800m）、カランバル峠（4,343m）、ダルコット峠（4,575m）を巡った記録。唐の高仙芝の越えた峠を探索する旅であったが、名峰コーヨ・ゾムやツイの景観が色どりを添えてくれただろう。

パキスタン、イスラムなどの文化についての解

説やトレッキング事情などもコンパクトにまとめられており、読んで楽しい報告書である。

B 5版 72頁、カラー4頁。1700円（送料共）

〒252 藤沢市湘南台2-36-11 広島三朗方

L A I L A 1994

創立50年の伝統を誇る東京白稜会であるが、会としてのヒマラヤ登山の機会はなかなかなかった。50周年の記念山行として、ヒマラヤ計画がもち上がり選ばれたのがカラコルムのライラであった。山の選定から隊員決定、推進の中での葛藤と、現在多くの単一山岳会隊が持つ問題を抱えながらも実現に至った経緯が記されている。

B 5版111頁

〒151 渋谷区本町4-24-5 恩田善雄方

新版・ヒマラヤ文献目録

—追加・訂正—

1994年11月に出版された薬師義美氏の「新版・ヒマラヤ文献目録」であるが、本人の弁によると「高価格のために売れ行きがにぶく、社長さんも私も高山病にかかったような状態」とのこと。

しかし、売れ行きの問題とは別に、刊行後も新しいデーターが次つぎに収集されカードが千点を越えるようになったこと。また、「目録」に氏自身によるミスや誤植なども結構あることがわかっているため、発行から1年たったのを区切りに、小冊子にまとめたもの。

これだけでも、ごく最近のデーター・ソースブックになる。ワープロ入力から騰写印刷も自分でやったと云う氏に脱帽である。

B 5版 169頁 1,000円（送料共）

〒617 長岡京市長岡2-22-18 薬師義美

忘年会のお知らせ

阪神大震災、地下鉄サリン、酷暑、ヒマラヤ大量遭難と、さまざまなことがあった1995年を振りかえり、又、新しい希望の年を語り合いたいと思います。是非お出かけ下さい。

日時：12月25日（月）19時～ 会費1,000円

場所：H A J ルーム（有楽町線東池袋・4番出口）

OBITUARIES (追悼)

マナスル初登頂

今西寿雄さん死去

1956年にマナスル(8,163m)に初登頂した今西寿雄氏が、11月15日午前10時37分、閉そく性黄だんのため大阪市福島区の病院で亡くなった。享年81歳。

奈良県生まれ。旧制浪速高校時代に鹿島槍北壁や済州島漢拏山の積雪期初登頂、京都大ではモンゴル、樺太探検などで活躍した。

1953年、京大学士山岳会アンナプルナ遠征隊の隊長を務める。1956年には日本山岳会第3次マナスル登山隊に41歳で参加、シェルパのガルツェン・ノルブとともに初登頂に成功。日本人初で唯一の8,000m峰登頂を記録した。

'85年から4年間、日本山岳会々長。'88年には日本・中国・ネパール三国友好チョモランマ／サガルマータ登山隊の日本側総隊長を務めた。

H A J 登山隊募集

ムスターグ・アタ (7,546m)

シルクロードのド真中、パミール高原にどっしり腰を据えて聳え立ち現地に住む人々から「氷山の父」として親しまれているムスターグ・アタでサマー・キャンプを行います。なお、アタを舞台としたサマー・キャンプはこの年をもって最後とする予定です。

現在、4名の申込者があり、隊が成立して準備を開始します。

記

1. 期 間:1996年7月21日～8月25日(36日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 切り:2月29日
5. 資料請求先:H A J 事務局

東京新聞の本

登山のオールラウンド情報誌



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

■第1特集

- 1月号★アイゼン、輪かん、スキー
タイプ別雪山山行
- 2月号 自然案内人と山を歩こう
山をもっと味わうために
- 3月号★全員集合!山スキーフリーク
- 4月号 自然の源・針葉樹と広葉樹、
照葉樹の森を歩く
- 5月号★GWに楽しむ山
雪稜・新緑そして花の山
- 6月号 北海道の山と人
日高、大雪、知床をめぐる
- 7月号★読者がつくる夏山プラン
ファミリー賛歌
- 8月号 湿原の山旅
地図で探したとっておきの池塘
- 9月号 私の好きな山小屋
近郊の山から北アルプスまで
- 10月号★HOW TO 紅葉の山を味わう
撮る、描く、遊ぶ
- 11月号 ローカル線の山旅
徹底ガイド付き
- 12月号 実践/雪山へのいざない
(入門編)

(★は特大号となります)

■特別企画

- 1月号「僕でも登れる？」
——冬のハケ岳を楽しむ
- 2月号「僕でも登れる？」
——アイスクライミングに挑戦
- 3月号「僕でも登れる？」
——尾瀬で山岳スキーに開眼
- 4月号「僕でも登れる？」
——これぞ岳人、春雪の西穂高
岳へ(12回完結)
- 5月号「アルプス・ツェルマット研究」
- 6月号「モンブラン一周トレッキング」
- 7月号「花のアルプス・ハイキング」
- 8月号「ドロマテの岩塔に遊ぶ」
- 9月号「南米ロライマ山にロストワ
ールドを訪ねる」
- 10月号「ニュージーランド——手付か
ずの自然を楽しむ」
- 11月号「海外トレックの王道・エベレ
スト街道を行く」
- 12月号「冬の北米、アウトドアライフ
最新事情」

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
(東京本社) 書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

3-3 ブロード・ピーク(布洛阿特・Broad Prak)

- * 山脈: カラコルム山脈。
- * 位置: [35° 49' 23" N, 76° 34' 15" E]
- * アプローチ: シャクスガム河まではチョゴリと同じ。上流に2日間で北ガッシャーブルム氷河のBC(4350m)に到着。
- * ルートの所要日数: 92年のスペイン隊は、BCからキャンプ4つを出し、最後はビバークしてBC設営後49日間で中央峰に登頂した。
- * 山の概念図: 主峰8051m、中央峰8011m。北峰7490m。
- * 通常の登山時期: シャクスガム河の渡河の関係から6月~8月の夏期。
- * 山名: [幅広い山頂]の意。但し、中国側の地図では中央峰に、「チョンヤン」の名がつけられている。
- * 小史: 1889年ヤングハズバンド、1926年メイスン、29年のデジ、35年のフィッサー隊、37年シプトン隊などがシャクスガム河の上流に入った。開放後は1982年に写真家の白川議員、イタリア隊などがシャクスガム河上流を撮影した。1986年には中国も調査に入り「CHINA'S KARAKORUM GLACIERS」と題する写真集を出版した。
- * 参考文献: シャクスガムの遙かなる峰(宮城県山岳連盟・1990年1月刊) BROAD PEAK-未踏の稜から中央峰登頂-(岩と雪161号)

登山の概要

1990年

6月 イタリア隊

初めて入山。しかし、シャクスガム河の徒渉に失敗し1名とラクダ3匹が死亡し敗退。

「隊長: アルトゥーロ・ベルガマスキラ16名」

1991年 東稜 スペイン隊

9月上旬に北ガッシャーブルム氷河4200mにBC設営。6200mの未踏峰(タラッコ・カンリと命名)の頂上にC2設営。10月に入り6500mまで達したが降雪のため登頂を断念した。

「隊長: ルイス・ラフォルス、オスカル・カディアチ、ホルディ・マグリニャ、ホアン・ヘラベルト、アルベルト・ゾンチーニ、クルト・ディームベルガー。」

1992年 東稜 スペイン隊

6月17日4350mにBC設営。キャンプ4つを出して8月4日一ビバークの末、カディアチ、ゾンチーニ、ダルマウ、ラフォルスの4名が中国側から中央峰の初登攀に成功した。

「隊長: ホルディ・マグリニャ、オスカル・カディアチ、ルイス・ラフォルス、エンリク・ダルマウ、ヘスス・エレナ、ホアン・ヘルベルト(以上スペイン) アルベルト・ゾンチーニ、(イタリア) クルト・ディームベルガー(オーストリア)」

3-4 クラウン(皇冠・Huangguan)

- * 山脈: カラコルム山脈。
- * 位置: チョゴリの北西37.2km。
[36° 10' N, 76° 20' E]
- * アプローチ: カシュガルからイエチェンを経てアカズ峠(3300m)、セラク(4900m)を越えてインホントンと呼ばれるチョゴリのBCまでは、チョゴリと同じ。クラウンのBCはインホントンから半日行程である。

インスガイティ氷河舌端約4000mがBCとなる。

* ルートの所要日数: 93年JAC東海隊はBC設営から54日目に登頂。下部氷河の荷上にポーター19名を10日間雇用。

* 山の概念: 主峰7295m。周辺に多くの衛星峰(6000m級)がある。

* 通常の登山期間: シャクスガム河の渡河の関係

から夏期と秋のいずれかとなる。

*山名：「皇帝の王冠のような山姿から命名」

*小史：インスガイティ氷河は中国最長の氷河であるが、1889年にヤングハズバンドによってクレヴァス氷河と命名された。1937年シプトンらが初めてインスガイティ氷河に入り、くまなく調査・測量をしたが、その時にクラウン峰の存在がわかった。

*参考文献：地図の空白部「1967年6月刊」

登山の概要

1985年

8月～11月 東壁 日本ヒマラヤ協会隊

初めての登山隊として入山。8月31日BC設営。東面から流出する氷河（後年タテノ氷河と命名）に入り、9月22日東壁6050mにC3を設営し、6300mまで到達するもルート下部が雪崩で消失したため登頂を断念した。

「隊長：館野秀夫(36) 中込清次郎(38) 菅沼勲(55) 遠藤京子(47) 小川貞夫(38) 星野貢(37) 森山安次(35) 石川昌(32) 橋本康弘(31) 宮阪憲一(24) 中野圭一(23)」

〔砂漠の涯の遠き頂き（昭和62年3月30日刊）〕

1987年

6月～9月 南東稜 静岡大学隊

6月18日BC設営。南東稜にルートのをのばし、菱形雪田の左にあるA字雪田を直上し、A字状岩壁に取りつくも30mで断念した。

「隊長：山本良三(47) 広瀬義輝(47) 堅山隆三(49) 星野貢(39) 落合守和(37) 清水久信(33) 岡本良治(28) 清水永保(30) 内山一彦(29) 桜井卓(25) 水野俊哲(23) 田山純士(22) 近藤信行(56)」

〔西域一万公里（平成元年10月31日刊）〕

〔皇冠峰登山を顧みて（山本良三）「山岳第83年」〕

9月～10月 南東稜 イギリス隊

静岡大学隊と入れ違いに入山し、同ルートを利用してA字ルンゼを登り、難関のA字状岩壁を突破したが、7240mで登頂を断念した。

「隊長：H. モーガン (31) ら10名」

「CROWNING THE DRAGON 1990年刊」

1990年

8月～10月 南東稜 日本ヒマラヤ協会

8月31日BC設営。9月22日南東稜5800mにC3を設営。そこから東壁に25Pルート工作を終えたが、9月27日C1からBCへ下降中の館野隊長と菅沼医師が懸垂氷河の崩落のため行方不明となった。このため登山は中止された。尚、翌年遺体となって発見された。「隊長：館野秀夫(41) 橋本康弘(36) 菅沼勲(61) 二俣勇司(35) 柳沢剛男(28) 佐々木剛(28) 益子英雄(22)」

〔皇冠峰の堅塁なお高く（ヒマラヤ230号）〕

1992年

8月～10月 南東稜 日本ヒマラヤ協会

8月28日BC設営。南東稜にルートのをのばし、9月22日C5を南東稜上6500mに設営。28日A字ルンゼを登りA字状岩壁を突破して7000m上に到達するも、10月2日アタックのためC4に移動中の二俣隊員が雪崩のため行方不明となる。搜索終了後10月8日再び5名がアタックのためC5に入ったが、悪天候のため登頂を断念した。

「隊長：山森欣一(48) 出口當(50) 橋本康弘(38) 二俣勇司(37) 斎藤繁(30) 木辺正夫(60) 田村正勝(50) 滝田収(35) 秋山和彦(33) 中川裕(31) 橋本珠樹(31)」

〔永別 皇冠峰（1994年5月刊）〕

1993年

5月～8月 東壁 JAC東海支部隊

5月29日BC設営。南東稜に入りA字雪田を避けて菱形雪田を直上するルートを開拓。7月14日菱形雪田の基部にC3を設営。7月22日徳島隊長、山崎、有富両隊員が初登頂に成功。その後27日に4名、28日4名、29日3名も登頂し全員登頂となった。

「隊長：徳島和男(48) 酒井秀紀(32) 阿部哲也(30) 亀田正人(27) 中島正徳(27) 鈴木幹夫(26) 山崎彰人(25) 夏目正憲(24) 宮坂仁(24) 有富保之(24) 中川邦仁(23) 笹森進也(22) 松岡清司(21) 長谷川哲也(21)」

〔The Crown（1994年3月31日刊）〕

3-5 チリン (麒麟 Chillin)

- * 山脈：カラコルム山脈。
- * 位置：チョゴリの西30.9km。インスガイティ氷河を挟んでクラウンの南20.3km。
[35° 56' N、76° 10' E]
- * アプローチ：カシュガルからイエチェンを経てアカズ峠 (3300m)、セラク峠 (4900m) を越えてインホンタンと呼ばれるチョゴリのBCまでは、チョゴリと同じ。サルボ・ラッゴ氷河とチャン・トク氷河の出合が実質的なBCとなる。
- * ルートの所要日数：94年岐阜大学隊はABC設営から38日目に登頂。ABCまでポーター25名を10日間雇用して荷上。
- * 山の概念：主峰7038m (チャン・トクⅠとも呼ばれる。またこの標高を使用している中国の地図上の名称はケチェンである。) 6365mのCOLを挟んで北北東2.6kmにチャン・トクⅡ (6972m) 峰があり、西1.8kmには横浜山岳会隊が1986年と88年に挑戦したが、未だ未踏である6890m峰がある。また、チャン・トクⅡの東北東3kmには根張りの大きな三角錐の雪峰6880m峰がある。
- * 通常の登山時期：シャクスガム河の渡河の関係から夏期と秋のいずれかとなる。
- * 山名：[チャン・トクは麓の地名]
- * 小史：中国側からは無し。6890m峰にはパキス

タン側から横浜山岳会が二度挑戦。

* 参考文献：地図の空白部「1967年6月刊」

登山の概要

1994年

5月～7月 北東稜 岐阜大学隊

前年ABC付近まで偵察した。初めての登山隊として入山。5月28日先発隊がインホンタンにBC設営。サルボ・ラッゴ氷河のD1までラクダを使用。ここから25名のポーターを10日間雇用して氷河上のD4まで荷上。さらに10名を雇用してチャン・トク氷河出合のABCまで荷上。6月12日ABC設営。24日本隊が合流。6365mのCOLを経由し7月16日6400mにC4を設営。19日吉田、山崎、川口隊員が初登頂に成功。20日に4名、23日2名、26日1名も登頂した。尚、チャン・トクⅡにも6365mのCOLから7月28日吉田、阪谷、山崎、加藤、渡辺が初登頂した。

「隊長：藤井洋(53) 鈴木延隆(55) 吉田弘樹(33) 阪谷正人(32) 河合和幸(31) 山崎彰人(27) 加藤博(23) 古市紀之(22) 渡辺綾美(22) 川口秀樹(20)」

[麒麟峰初登頂 (1995年7月3日刊)]

* 残念なことに間違いが目につく報告書である。

3-6 その他の山々

1) 6302m峰

チョゴリ氷河とスキャン氷河の間にある。1937年にこの地域を探索したシプトンとティルマンが7月12日に初登頂した。頂上直下で苦労したが、頂上からクラウンやスカムリを見た。当時は6,350mの標高であった。「喬戈里峯登頂記」にC3からみたカラー写真がある。「地図の空白部P153」

2) 6040m峰

インホンタンの南に聳える。1982年にチョゴリの支援隊として参加した川那辺一(24)ら7名がキャンプ1つを出して6月2日初登頂した。当時

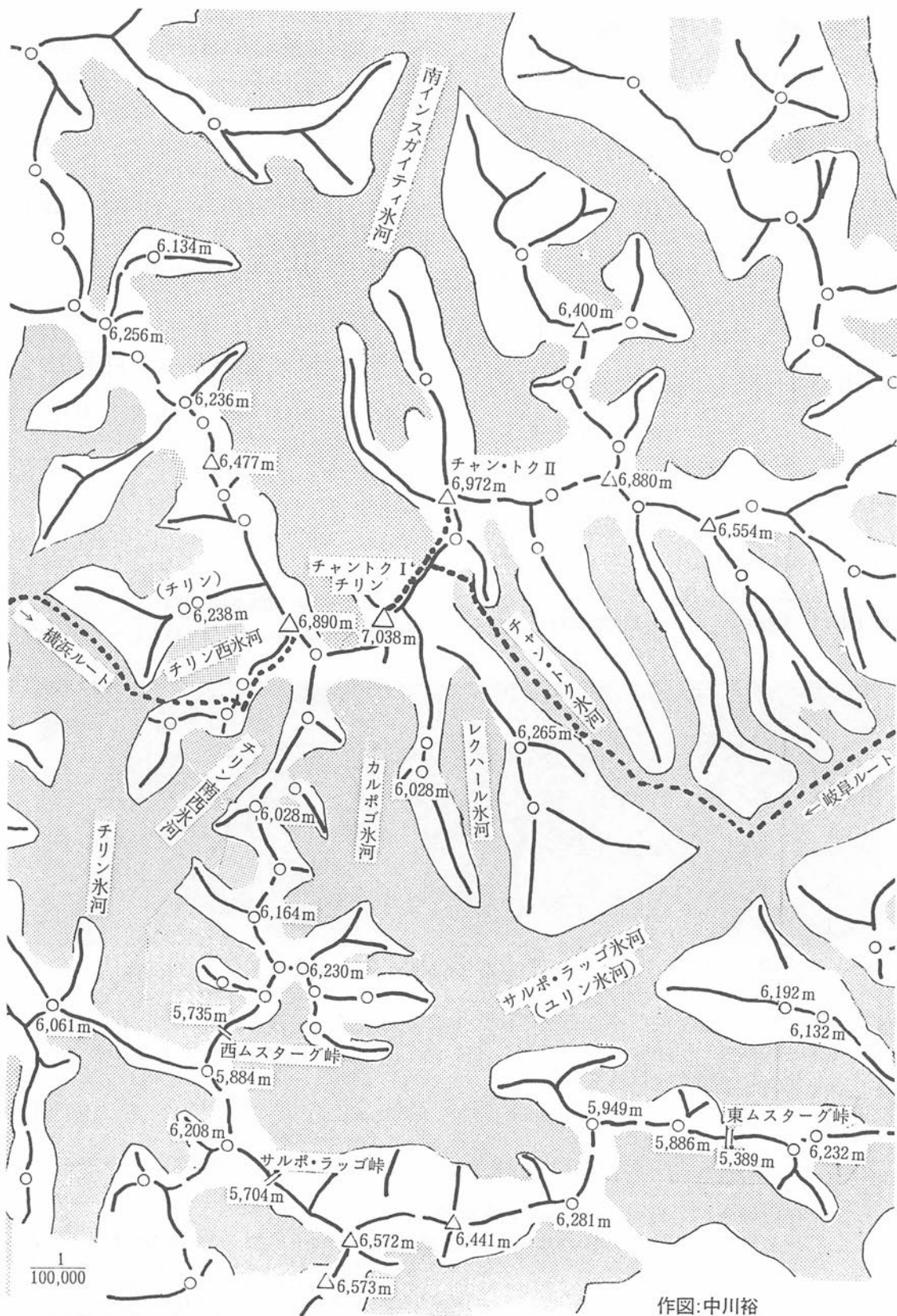
は6050mの標高。「チョゴリへの道P82」

3) 6117m峰

クラウンの南、タテノ氷河右岸にある。初めてクラウンに挑戦したHAJ隊の中込と石川が、1985年9月30日初登頂し、翌日に両名を含む8名も登頂した。「砂漠の涯の遠き頂きP26」

4) 6640m峰

チョゴリBC付近とされているが、詳細はわからない。チョゴリ登頂をめざして入山した英米隊のE. パージェスとB. ジョンソンが、1994年夏にその南壁を登った。(岩と雪169号)



■ 寸 感 ■

ヒマラヤから時期外れの大量遭難の報が飛び込んできた。土曜日の夜、日付が変わるまでの3時間朝刊締切りに間に合わせる新聞各社からの照会があいついだ。このようなプレスへの対応は、山の社团法人にしてもらいたいと『切に』思う。

ネパールのプラチャンダ・シュレスタさんが、治療のため再来日する。支援費用の不足分が約30万円という善意のカンパは下記まで。(山森)
郵便振替 01180-9-66354 プラチャンダ支援基金

事務局日誌(11月)

- 2日(木) インド・ヒマラヤ会議関係発送
- 10日(金) ヒマラヤ289号発送
- 11日(土) ネパール・ヒマラヤ雪崩遭難でプレス各社から照会相つぐ。
- 13日(月) 中国登山協会からネパール雪崩の照会。資料FAX。
- 16日(木) 赤旗来会、ネパール雪崩取材
- 17日(金) プレス各社へ「日本隊遭難の記録等」

案内発送

- 18日～19日 東北海外登山研究会(盛岡・尾形)
- 20日(月) 産経新聞来会、ネパール雪崩取材
- 20日(月) 中国登山協会から「雪域神山」
- 25日(土) ヒンズークシュ・カラコルム研究会(八王子・山森・寺沢)
- 26日(日) 労山海外登山研究会(松戸・山森)
- 27日(月) 東京集会(19名)
- 29日(水) プラブーツ懇談会(HAJ)

ヒマラヤ No.290 (1月号)

平成7年12月10日印刷 8年1月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる旅へ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3052
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004